

#### (4) 掘立柱建物跡

##### SB1(第19図、表3、PL.9)

**位置** 調査区北西H16、I16グリッド、標高58.5～58.75mの尾根部平坦面に立地する。本遺構北隣に貯蔵穴SK67、南東方向4.5mにSK68が位置している。

**規模と形態** 平面形は桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡であり、主軸はN-46°-W、梁桁に囲まれた面積は約7.35㎡である。柱間距離はP1-2:2.45m、P2-3:2.94m、P3-4:2.5m、P4-1:2.96m、柱穴の平面形は直径33～51cm前後の不整形円形であり、検出面からの深さは30～48cmを測る。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は径5mm大の炭化物を含む暗褐色土と黄褐色土に概ね分かれ、P1では直径12～16cmの柱痕が確認された。非掲載であるが、柱穴内からは弥生時代中期後葉の土器小片が出土している。

**時期** 遺構の時期は、出土土器と埋土の特色から弥生時代中期後葉と考える。

##### SB2(第20図、表3、PL.9)

**位置** 調査区南端H18グリッド、標高58.25～58.5mの尾根平坦面に立地する。東側約1.5mにSI14、約6mにSI13が位置している。

**規模と形態** 平面形は桁行1間、梁行1間の掘立柱建物跡であり、主軸はN-35°-E、梁桁に囲まれた面積は約2.8㎡である。柱間距離はP1-2:1.81m、P2-3:1.58m、P3-4:1.76m、P4-1:1.54m、柱穴の平面形は直径34～50cm前後の不整形円形であり、検出面からの深さは33～51cmを測る。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は径5mm大の炭化物を含む暗褐色土と黄褐色土に概ね分かれ、P4では直径12～14cmの柱痕が確認された。非掲載であるが、柱穴内からは弥生時代中期後葉の土器小片が出土している。

**時期** 遺構の時期は、出土土器と埋土の特色から弥生時代中期後葉と考える。

#### (5) 土坑

##### SK61(第21図、表12・13・14、写真3、PL.10)

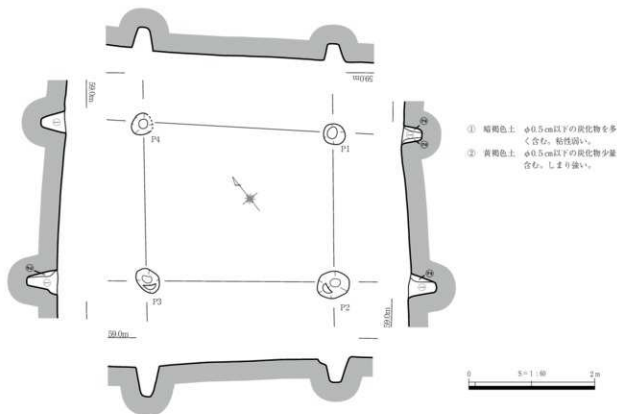
**位置** 調査区北西H15グリッド、標高59.0mの尾根平坦面に立地し、北西方向約3.4mにSK62が位置している。

**調査の経過** Ⅲ層上面において炭化物と焼土が密集する部分を検出し、精査を行ったところ不整形円形のプランを検出した。炭化材の配置と被熱範囲に留意しながら調査を実施した。

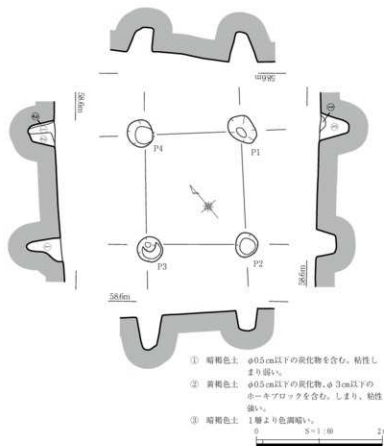
**規模と形態** 平面形は、長軸1.12m、短軸0.93mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは10cmで、壁面は40度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は、皿状で、底面は不整形円で平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は4層に分かれ、1層中で長軸10cm大の炭化材や微細な炭化物・焼土粒が多く確認された。北壁と南壁は硬く焼きしまった赤褐色の被熱面が部分的に認められた。したがって、簡易な「伏せ焼き」法を用いて炭を焼いた製炭土坑であると考えられる。1-B区にSK58も同様に製炭土坑である。

**時期** 本遺構から出土した炭化材について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施している(第4章



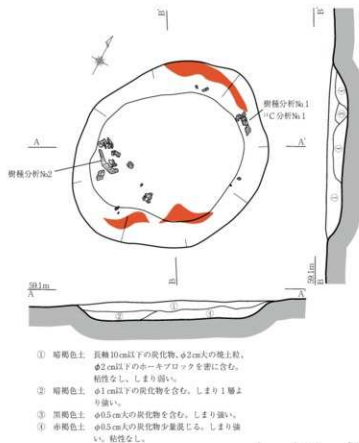
第19図 SB1



第20図 SB2

第1・2節)。その結果、炭化材の年代は $1420 \pm 40$ 年BPとなり、6世紀後半から7世紀代に位置づけられる。また、2点の樹種は落葉広葉樹のクスギもしくはアヤマキの可能性があり、優良な木炭となる樹種として選択的に用いられた可能性が指摘されている。

このような平面形が円形もしくは隅丸方形を呈し、壁面を中心に被熱痕跡を顕著に残す土坑は近年の調査によって増加しており、周辺遺跡では中道東山西山遺跡で14基、久蔵谷遺跡で4基、別所中峰遺跡で8基検出している。遺構の帰属時期は、放射性炭素年代測定を行ったものについては古墳時代から古代にまとまる傾向がある。



第21図 SK61

大きく上層の暗褐色土と下層の黄褐色土に分かれる。下層は地山と比較的に似た土質であり人為的な埋め戻しの可能性がある。1層中から夥しい土器小片が出土しているため、廃棄土坑の性格を帯びていたものと推定される。

**出土遺物** 土器は、甕6点、壺1点、高坏2点を掲載している。43・44は口縁部に2条の凹線がめぐり、頸部ナデ、体部ハケ調整が施されている甕である。いずれも内面頸部までヘラケズリは及んでいない。45は口縁部に3条の凹線を引き、肩部にハケ調整後、撈描波状文を施している。49はラッパ状に口縁部が開く壺であり、口縁部に3条の凹線が引かれている。50・51は高坏脚裾部であり、50は脚裾付近に完全に貫通していない三角形透孔が認められる。いずれも裾部に1条の凹線がめぐり、52・53は焼成粘土塊である。53は粗くナデ付けられた表面が残存しているが、その他の面は微細なクラックが認められ破面となっている。

S15・16はサヌカイト製の凹基式石鏃である。S15の表面は側縁からの調整加工が器体中軸まで及んでいるが、裏面は素材面が広く残っている。S16は表裏面に側縁から調整加工を器体中央まで及ばせ断面凸レンズ状に仕上げている。基部寄りには未加工の広いネガ面を残していることから、根挟み部を意図的に作り出した可能性がある。いずれもほぼ同規格の石鏃であり、器体中央に平坦面を有することを基本とするので、S18のような板状剥片を素材としていたと判断される。S18は表裏両面に大きな素材面を残し、両極剥離が加えられたサヌカイト製の石鏃素材剥片である。表面右側面には両極剥離以前の分割面が残っている。S17はサヌカイト製の石鏃である。基部に素材面を残し、両側縁からの調整剥離を加えて刃部を作り出している。刃部の作出に当たっては、左側縁の突出部が本来の刃

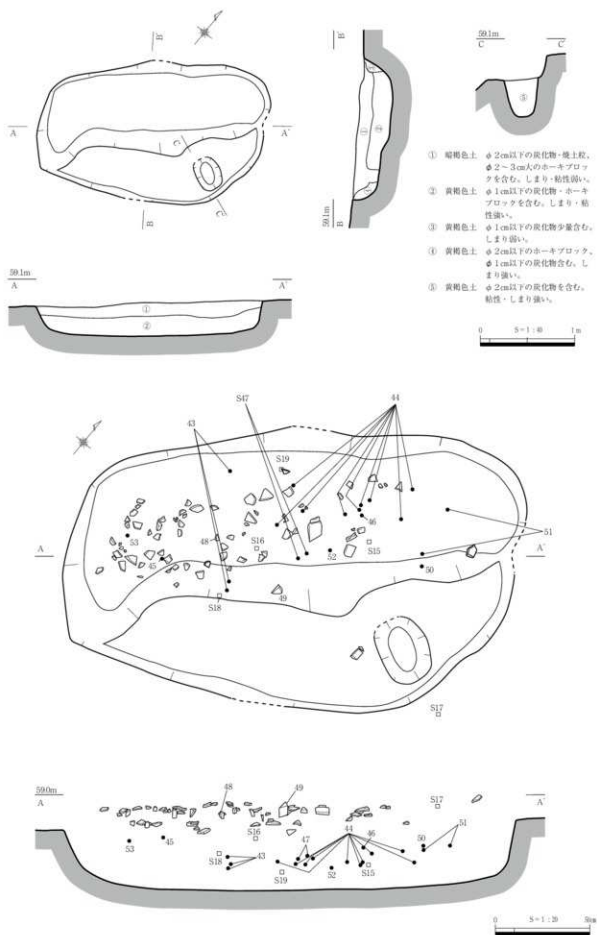
### SK62(第22・23図、表5・9・11、PL.11・23)

**位置** 調査区北西H15グリッド、標高58.75～59.0mの尾根頂部に立地し、南東方向約3.2mにSK61が位置している。

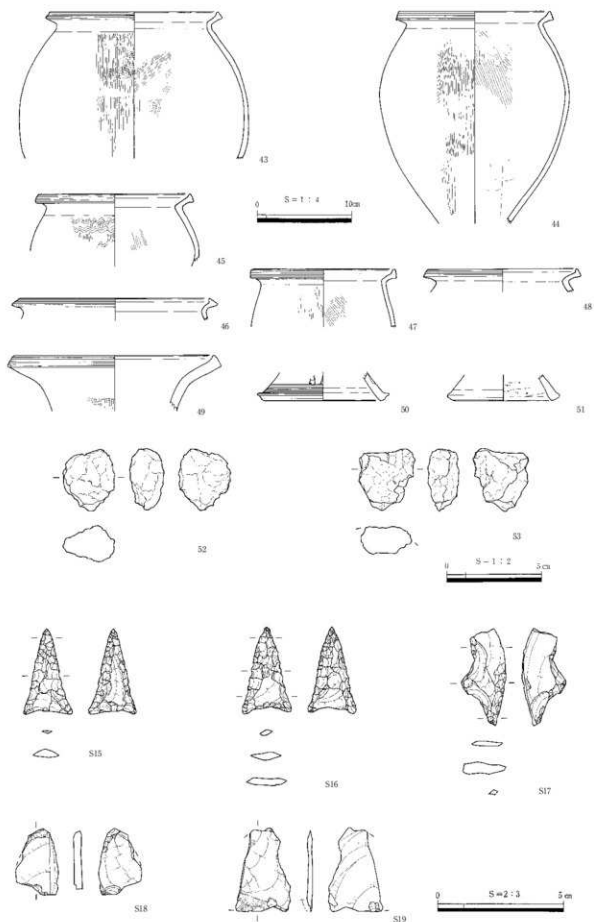
**調査の経過** IV層上面において多量の土器小片と炭化物を含む長楕円形のプランを検出し、形態から墓の可能性を想定しながら調査を行った。結果、トレンチ(A-A)により小口など棺の存在を示す痕跡が認められず土坑と判断した。

**規模と形態** 平面形は長軸248m、短軸135mの長楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは35cmで、壁面は48度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方はⅦ層を掘り込んで底面とし、東半部がテラス状の二段構造となっている。床面東側のテラス部にはP1(35×26～39cm)の1基が確認された。

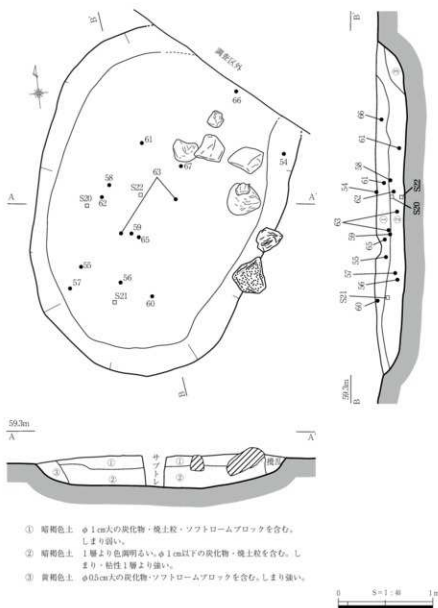
**埋土と遺物の出土状況** 埋土は4層に分



第22図 SK62



第23図 SK62出土遺物



第24図 SK63

**規模と形態** 平面形は北側の一部が調査区外に及んでいるため全形は不明であるが、長軸3.8m、短軸2.5mの楕円形を呈するものと考え。検出面から底面までの深さは34cmで、壁面は45度の角度で緩やかに立ち上がる。Ⅷ層を底面としており、ほぼ平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は3層に分かれ、1・2層は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土が堆積し、数多くの土器小片と大型礫が認められた。埋土は壁際からの自然堆積と想定されるが、これらの礫や土器などは埋没過程において人為的に廃棄されたものと考えられる。したがって、本遺構は廃棄土坑の性格を帯びていたものと推定する。

**出土遺物** 第25図に出土遺物をまとめている。54～60は甕であり、遺存状態は不良である。いずれも口縁部に2～3条の凹線文がめぐり、体部は内外面ともハケ調整が認められる。このうち57は肩部が大きく張った形態であり、内外面赤色塗彩がなされている。61は斜め下方に大きく張り出した口縁部に2～3条の凹線がめぐり、口縁端部に1条、内傾した口縁下に6条の凹線が引かれている。64・65は赤色塗彩が成された高坏脚部である。脚部に刺突文がめぐり、脚部

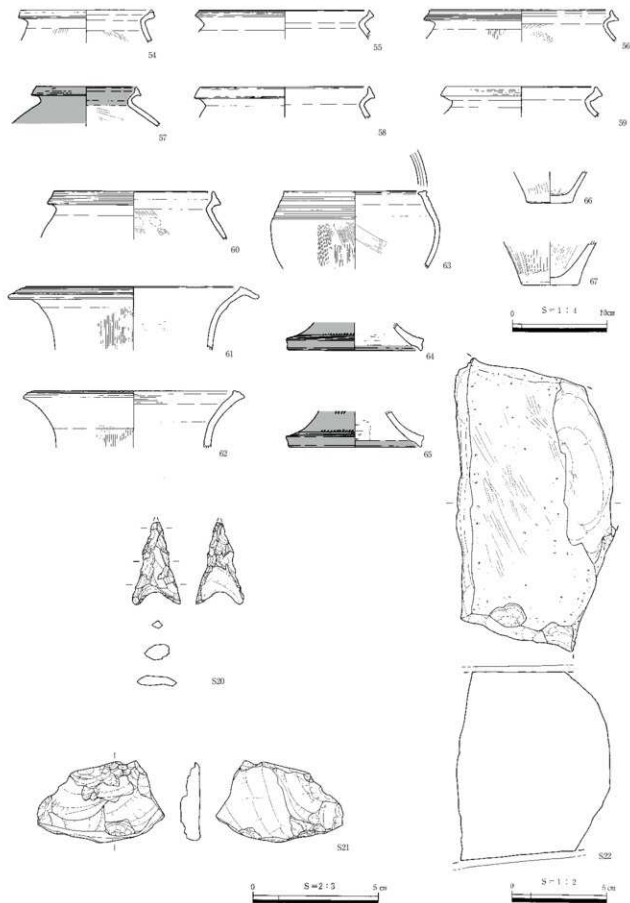
部であったものが、製作途中での欠損のため、基部を刃部に作り変えた可能性がある。S19は表面に研磨痕を残すサヌカイト製の剥片である。

**時期** 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

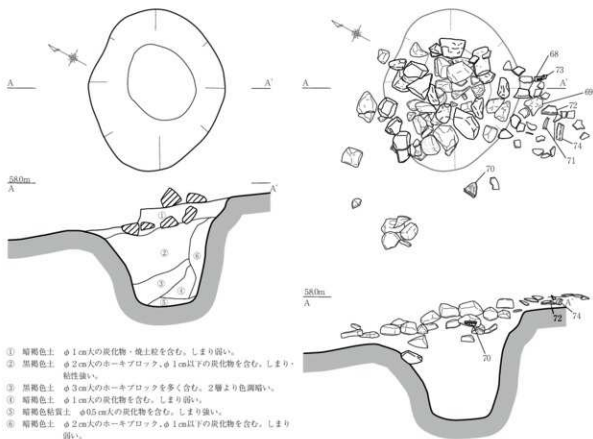
SK63(第24・25図、表5・11、PL.12・13)

**位置** 調査区北東G16グリッド、標高59.0～59.25mの尾根頂部に立地し、南西約2.8mにSK66、西側約3.5mにSX16が位置する。

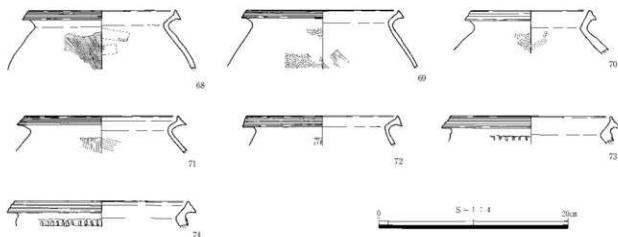
**調査の経過** Ⅳ層上面において多量の土器小片や人頭大の礫が含まれた暗褐色土のプランを検出した。検出面において大型礫が点在している状況が確認されたため、墓を想定し精査を行ったが、掘り方や埋土の状況から土坑と判断した。



第25図 SK63出土遺物



第26図 SK64

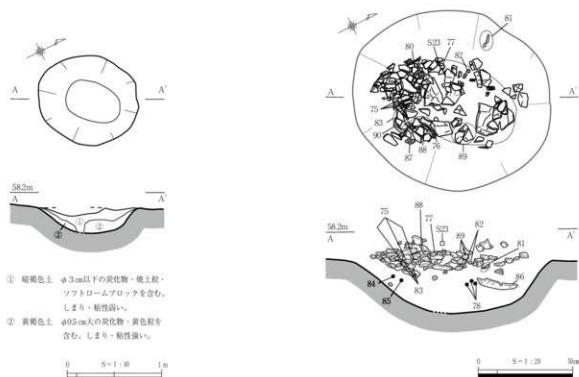


第27図 SK64出土遺物

部に1条の凹線がめぐっている。66・67は甕もしくは壺の底部であり、外面はミガキ、内面はハケ・ナデ調整が施されている。

S20は表表面に素材面を大きく残すサヌカイト製石鏃である。先端部はわずかに欠損し、断面も厚く側縁からの調整加工も粗い。S21は両極剥離が加えられたサヌカイト製の石鏃素材剥片である。下面は両極剥離以前の分割面があり、上下の縁辺につぶれたような階段状剥離痕が見られる。S22は垂角礫を素材とした安山岩製の砥石である。表裏両面とも平滑で擦痕が認められるが、裏面の擦痕は粗い。右側面の一部と左側面、下面は割れ面であり本来はもう少し大きなものであったと考えられる。





第28図 SK65

**時期** 遺構の時期は、出土土器がIV-1・2様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と想定される。

**SK64 (第26・27図、表5・6、PL.13・38・40)**

**位置** 調査区南西I18グリッド、標高57.75mの緩斜面上に立地し、南東方向約1mにはSK65が位置している。

**調査の経過** 谷部のⅢ層を掘り下げている過程で、焼礫と土器が密集して検出されたため、集石として立ち割りをを行い精査した。その結果、集石下部に土坑が確認されたため集石土坑として位置づけを行った。

**規模と形態** 平面形は、長軸0.85m、短軸0.72mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは54cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込んでおり、やや湾曲している。

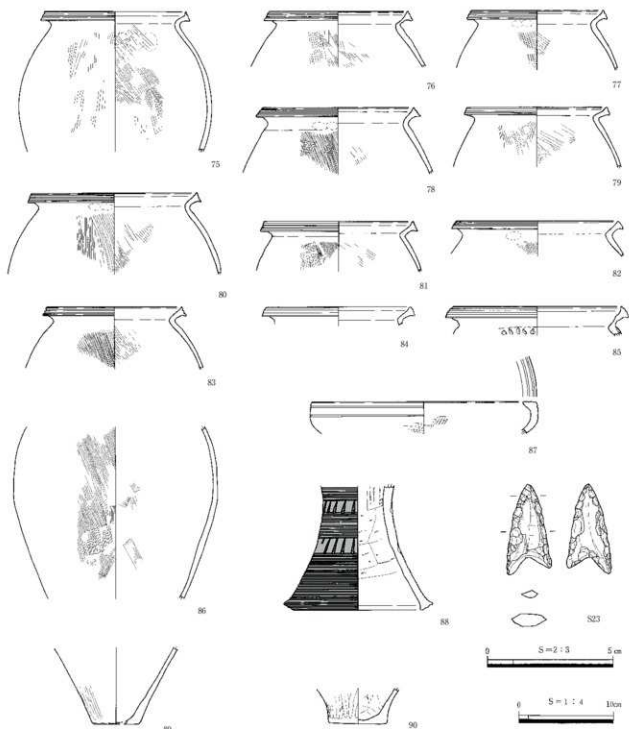
**埋土と遺物の出土状況** 礫の広がりには長軸80cm、短軸63cmの不整形円形を呈し、高低差は34cmを測る。礫は安山岩が主体を占め、表面は被熱酸化して赤褐色を呈し、クラックが認められるものが多い。埋土は6層に分かれ、最上層の1層は多くの炭化物や焼土粒、径10～20cm大の焼礫を包含している。集石の南側には弥生中期後葉の甕が廃棄されている。

**出土遺物** 本遺構からは甕68～74が出土している。68～72は口縁部に2～3条の凹線が引かれ、頸部ナデ、体部にハケ調整が施される。73・74はこれに加え頸部に刻目貼付突帯が加飾されている。

**時期** 遺構の時期は、出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

**SK65 (第28・29図、表6・11、PL.28・29・38)**

**位置** 調査区南西I18グリッド、標高58.0～58.25mの尾根頂部に立地し、北西方向約1mにSK64が



第29図 SK65出土遺物

位置している。

**調査の経過** IV層上面において多量の土器と炭化物を含む楕円形のプランを検出した。土器が重層している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

**規模と形態** 平面形は長軸1.06m、短軸0.93mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは27cmで、壁面は35度の角度で緩やかに外傾して立ち上がる。掘り方はⅦ層を掘り込んで底面とし、湾曲している。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分かれ、壁際からの流入による自然堆積と考えられる。最上層

の暗褐色土中から夥しい土器が出土している。土器は甕類を中心として5面にわたって出土している。いずれも完形に復元できるものではなく、部分的に欠損している。また、表面には煤などが付着していることなどから、使用後に廃棄されたものと推定される。

**出土遺物** 多量の出土遺物のうち、甕75～86、高坏87・88を図示している。甕75～85は2～3条の凹線を口縁帯にめぐらせ、肩～体部にかけてハケ調整を施す。内面は口縁～頸部はナデ、体部はハケ調整が認められる。このうち85は頸部に刺突を施した突帯が貼り付いている。87・88は高坏の坏部と脚部である。87は肥厚した口縁端部に2条、口縁直下に2条の沈線がめぐっている。88は脚部に2段の三角形擬似透孔を配し、その間隙に多数の沈線文が引かれる。脚裾部にも2条の凹線があり、外面は赤色塗彩が施される。

S23はやや身厚なサスカイト製石鏃である。表裏面は両側縁からの調整剥離が加えられるが、中心部には大きく素材面が残っている。表面の素材面には研磨痕が認められる。

**時期** 出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

#### SK66(第30～32図、表11・6、PL.30・31・39)

**位置** 調査区北東G16グリッド、標高58.8mの尾根頂部に立地し、北西方向約3mにSX16が位置している。

**調査の経過** Ⅳ層上面において多量の土器と炭化物を含む楕円形のプランを検出した。土器が重層して堆積している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

**規模と形態** 平面形は長軸1.13m、短軸1.1mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは23cmで、壁面は50度の角度で緩やかに外傾して立ち上がる。掘り方はⅥ層を掘り込んで底面とし、湾曲している。

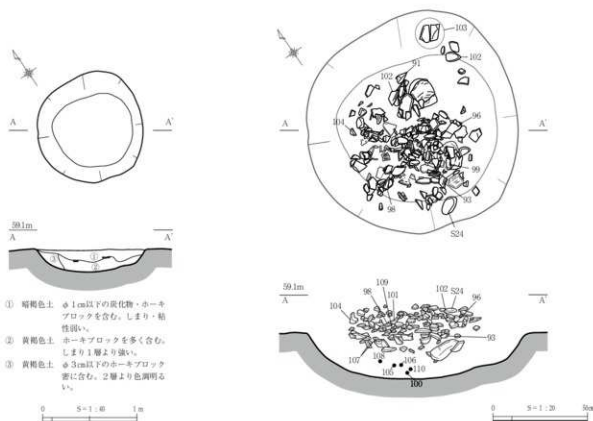
**埋土と遺物の出土状況** 埋土は3層に分かれ、いずれも壁際からの自然堆積と考えられる。最上層の暗褐色土中から夥しい土器が出土している。土器は甕を中心として4面にわたって出土し、いずれも完形に復元できるものではなく、部分的に欠損している。また、表面には煤などが付着していることなどから、使用後に廃棄されたものと推定される。

**出土遺物** 91～100は甕、101～104は壺、105～110は高坏である。甕の一群は口縁部に2～3条の凹線を有し、体部にハケ調整が施されることで共通するが、96～100は指頭圧痕貼付突帯がめぐる。

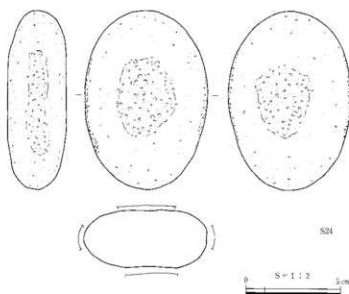
また、96は口縁部に円形浮文が付くことで他とは異なる特徴を持っている。101・102・104は壺の口縁から頸部に該当し、口縁端部に2～3条の凹線、頸部はタテ方向のハケ調整が施される。103は壺の頸部から肩部に該当し、頸部に4条の凹線が引かれている。105～107は口縁直下に2～3条の凹線がめぐる高坏坏部である。109は口縁を水平方向に屈曲させる高坏坏部であり、端部に1条の凹線が見られる。110は高坏脚部であり、完全に貫通していない三角形透孔を配し、その下部に13条の沈線文が引かれている。

S24は扁平な楕円形磔を素材とした敲石であり、表裏面の中央と左右両側面に敲打痕が見られる。いずれの敲打痕も浅く使用の頻度も少なかったと考えられる。

**時期** 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。



第30図 SK66



第31図 SK66出土遺物(1)

## SK67(第33・34図、PL.15・32)

**位置** 調査区北西H15・16グリッド、標高58.5～58.75mの尾根部平坦面に立地し、南隣にSB1が位置している。

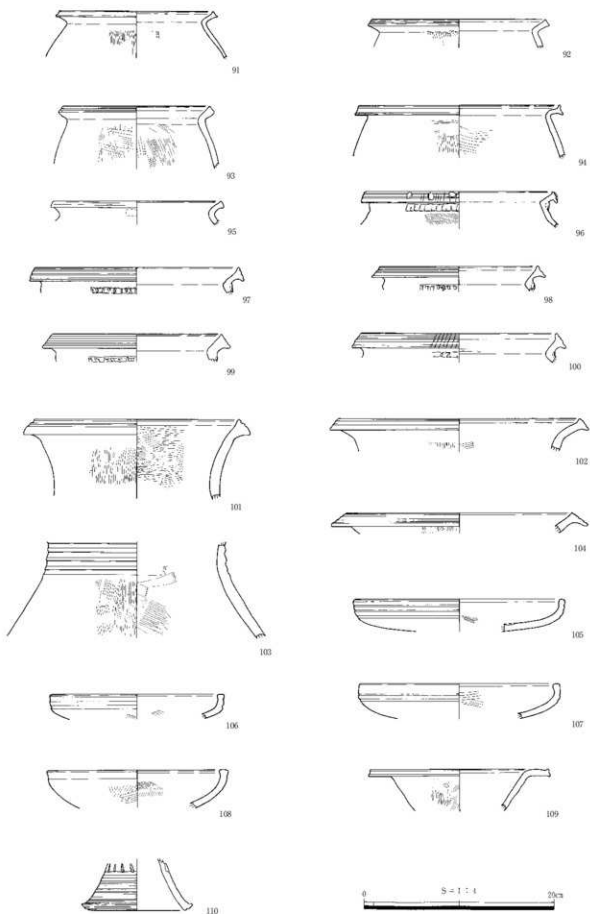
**調査の経過** IV層上面において、微細な炭化物を含む暗褐色土の不整形円形のプランを検出した。サブトレンチによってやや括れた下部から底部がさらに広がるのがわかり、貯蔵穴の可能性が高いと判断し調査を進めた。

**規模と形態** 検出規模は開口部で長軸1.95m、短軸1.64mで、検出面から底面までの深さは86cmである。掘り方は断面

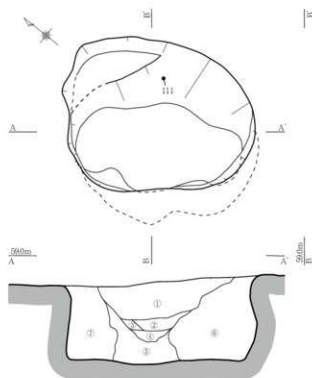
上半の内側に括れる部分が東から南壁において認められ、フラスコ状を部分的に呈している。VIII層を掘り込んで底面としており、ほぼ平坦となっている。以上から、本遺構は貯蔵穴と想定される。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は6層に分層できるが、中心部は主に炭化物を含む暗褐色土、壁際がホーキブロックなどの地山を含む黄褐色土が堆積する。壁際が大きく崩落し、中心部の窪みに土器などが流れ込んでいる状況から、埋土は自然堆積と想定される。遺物は1層に主に含まれており、総じて少ない。

**出土遺物** 遺物は壺1点を図示している。口縁部に3条の凹線が見られ、頸部に刻目貼付突帯がめぐつ



第32図 SK66出土遺物(2)

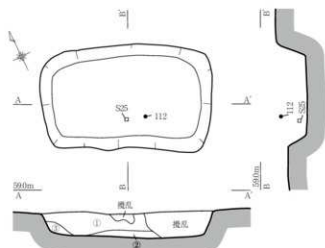


第33図 SK67

- ① 暗褐色土  $\phi$  1cm大の炭化物、黄色粒を含む。しまり・粘性弱い。
- ② 暗褐色土  $\phi$  0.5cm以下の炭化物、 $\phi$  2cm以下のワットロームブロックを含む。しまり強い。
- ③ 黄褐色土  $\phi$  1cm大の炭化物少量含む。粘性弱い。
- ④ 黄褐色土  $\phi$  0.5cm以下の炭化物少量含む。粘性強い。
- ⑤ 暗褐色土  $\phi$  1cm大の黄色スコリア、 $\phi$  0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。
- ⑥ 黄褐色土  $\phi$  0.5cm大の炭化物、 $\phi$  3cm以下のコーキブロックを含む。しまり強い。
- ⑦ 暗褐色土  $\phi$  0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり・粘性強い。

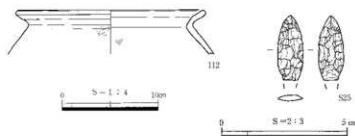


第34図 SK67出土遺物



第35図 SK68

- ① 暗褐色土  $\phi$  1cm以下の炭化物を多く含む、 $\phi$  1cm大のコーキブロックを含む。しまり・粘性弱い。
- ② 明黄褐色土  $\phi$  0.5cm以下の炭化物を含む。しまり・粘性強い。
- ③ 黄褐色土  $\phi$  3cm以下のコーキブロックを含む。しまり・粘性強い。



第36図 SK68出土遺物

ている。

**時期** 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

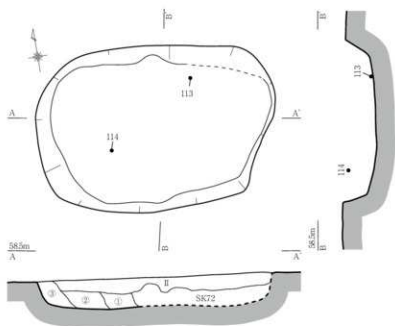
#### SK68(第35・36図、PL.15・32・38)

**位置** 調査区中央H16グリッド、標高58.75mの尾根部平坦面に立地し、南東側約1.5mにはSI12が位置している。

**調査の経過** IV層上面において炭化物を多く含む暗褐色土の隅丸長方形のプランを検出した。平面形から墓の可能性を想定して調査を実施したが、土層断面や底面から小口など棺の存在を示す痕跡が認められなかったことから、土坑と判断した。

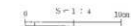
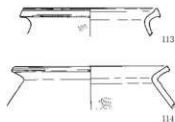
**規模と形態** 平面形は長軸1.31m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈している。検出面から底面までの深さは28cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はVII層を掘り込んでおり、ほぼ平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は3層に分か



第37図 SK69

- ① 黄褐色土 φ0.5cm以下のホーキブロックを含む。  
粘性・しまり強い。
- ② 暗褐色土 φ0.5cm以下の炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 φ1cm以下の炭化物、φ3cm以下のホーキブロックを含む。しまり・粘性強い。



第38図 SK69出土遺物

れ、東側の三分の一ほどに木の根攪乱が及んでいた。1層中に径1cm大の炭化物やホーキブロックが含まれており、壁際からの自然流入と考えられる。遺物は1層中から出土しているが、総じて少ない。

**出土遺物** 112は口縁部が風化により調整不明であるが、体部にハケ調整が見られる甕である。S25はサヌカイト製の有茎石鏃である。表面は器体中央まで調整加工を施し、裏面は中央に素材面を残している。

**時期** 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

#### SK69 (第37・38図、表6、PL.16・32)

**位置** 調査区中央南寄りH17グリッド、標高58.0～58.25mの尾根部平坦面に立地し、東半をSK72に切られている。北側約1mにはSI12が位置している。

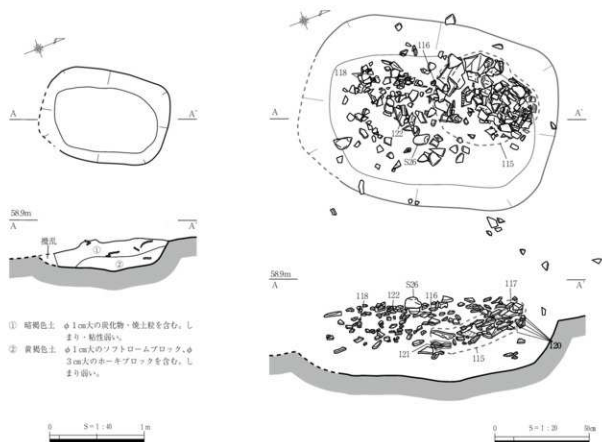
**調査の経過** Ⅲ層上面において、炭化物を多く含んだ不整楕円形のプランを検出したため、土坑として調査を行った。

**規模と形態** 平面形は長軸2.5m、短軸1.77mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは34cmで、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。底面はⅥ層を掘り込んでおり、ほぼ平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は3層に分かれ、壁際からの自然流入と考えられる。埋没過程において、SK72が掘削されたものと考えられる。遺物は総じて少ない。

**出土遺物** 甕113・114を図示している。いずれも風化により不明な点が多いが、口縁部に2条前後の凹線を持ち、肩部にハケ調整が認められる。

**時期** 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。



第39図 SK70

## SK70(第39・40図、表6・7・11、PL.16・17・32)

**位置** 調査区中央H17グリッド、標高58.5～58.75mの尾根頂部に立地し、西側約30cmにSI12が位置する。

**調査の経過** IV層上面において多量の土器や炭化物が含まれた暗褐色土のプランを検出した。切り株の根によって部分的な攪乱を受けている。土器が重層して堆積している状況であったため、面的に記録をとりながら掘り下げを実施した。

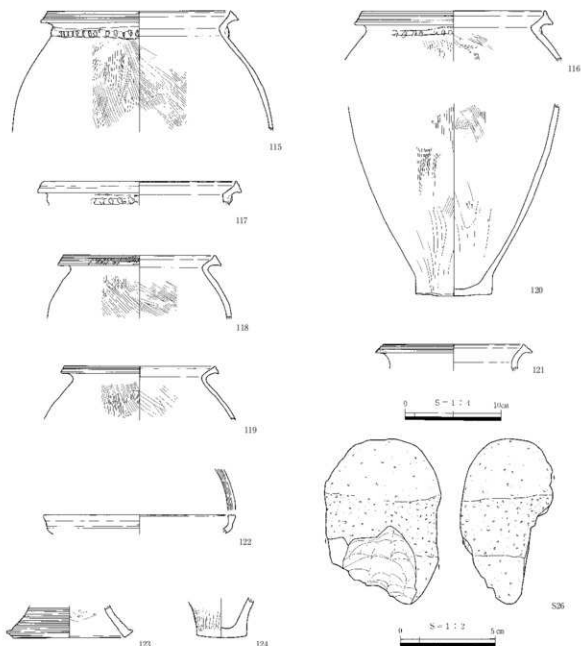
**規模と形態** 平面形は長軸1.36m、短軸0.98mの隅丸長方形を呈している。検出面から底面までの深さは34cmで、壁面は60度の角度で緩やかに立ち上がる。VII層を底面としており、ほぼ平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分かれ、壁際からの自然堆積と考えられる。1層暗褐色土を中心に数多くの土器が含まれることから、土坑の埋没過程において人為的に廃棄されたものと考えられる。

**出土遺物** 115～119は口縁部に2～3条の凹線が引かれ、頸部の貼付突帯に小口状の工具で連続刺突が施される。118・119・121は2～3条の凹線を口縁部にめぐらす甕の口縁～肩部破片である。体部内外面のハケ調整は比較的良好に観察できる。120は甕の体部から底部であり、内面のヘラケズリは体部下半に留まっている。122は口縁端部及び口縁直下に2条の凹線がめぐる高坏坏部である。123は高坏脚部であり、脚裾部に多条平行沈線が引かれている。

S26は楕円形礫の器体中央に網掛け溝を作り出した瀬戸内型石錘である。下半部が欠損している。





第40図 SK70出土遺物

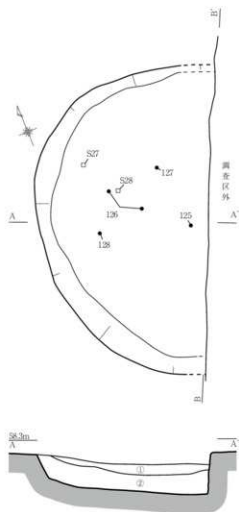
**時期** 遺構の時期は、出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と想定される。

**SK71(第41・42図、表7・11、PL.32・38・39)**

**位置** 調査区東端G17・18グリッド、標高57.75～58.0mの緩斜面上に立地し、南西側1mにはSI13が位置している。遺構のほぼ半分が調査区外に及んでいるため、全体形状は不明である。

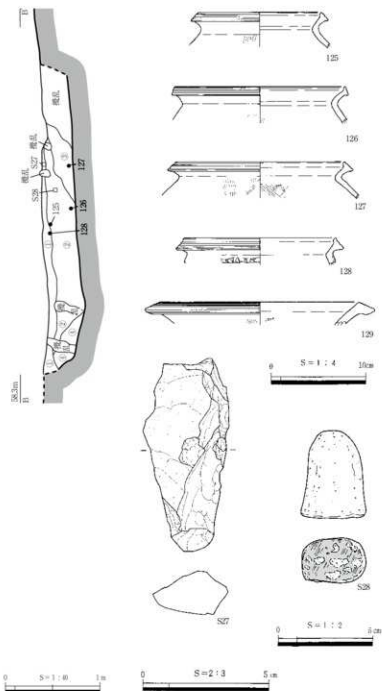
**調査の経過** Ⅳ層上面において、弥生土器が集中して出土する範囲を検出し、竪穴建物の可能性も視野に入れながら精査を行った。柱穴や焼土面などが検出されなかったため、土坑として判断し調査を行った。

**規模と形態** 平面形は現況で長軸3.25m、短軸1.85mの不整形であるが、全体形状はほぼ東西方向に主軸を有する楕円形と想定される。検出面から底面までの深さは38cmで、壁面は60度の角度で外傾



- ① 暗褐色土 φ1cm以下の炭化物・焼土粒、φ2cm大のホーネブロックを含む。粘性・しまり強い。
- ② 暗褐色土 φ2cm以下の炭化物・焼土粒・ソフトロームブロック・ホーネブロックを含む。粘性・しまり強い。1層より色調異なる。
- ③ 黄褐色土 φ5cm大のホーネブロック、φ1cm以下の炭化物を含む。しまり強い。
- ④ 黄褐色土 φ0.5cm大の炭化物・焼土粒・ソフトロームブロックを含む。しまり強い。

第41図 SK71



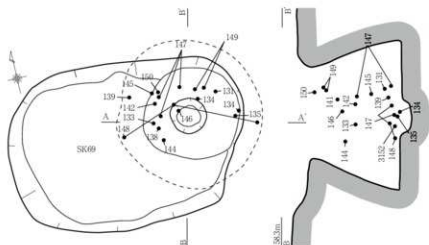
第42図 SK71出土遺物

して立ち上がる。V層を掘り込んでおり、底面はほぼ平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は4層に分かれ、1・2層の暗褐色土中に土器小片が多く認められた。北壁寄りには木の根による部分的な擾乱を受けている。埋土は壁際からの自然堆積と考えられる。

**出土遺物** 125～128は甕の口縁～肩部破片である。口縁部は2～3条の凹線が引かれ、頸部はナデ、体部はハケ調整である。このうち128は小口状の工具により刺突を施した突帯が貼付けられている。129は口縁端部が斜め下方向に張り出した壺であり、3条の凹線がめぐる。

S27は二次加工のある桂化木剥片である。板状の桂化木の縁辺に調整加工を施していることから、管玉製作に伴う石針素材の可能性がある。S28は小型の棒状礫を用いた安山岩製の磨石である。磨面



は棒状礫の割れ面を使用したものと考えられ、部分的に窪みが認められる。

時期出土土器がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

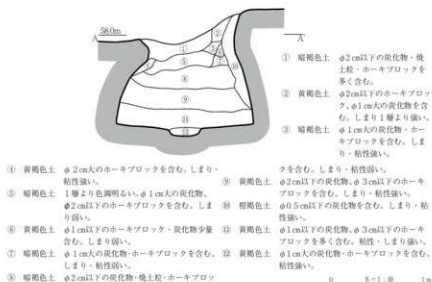
SK72(第43・45図、表7～9、PL.19・33)

位置 調査区中央南寄りH17グリッド、標高58.0～58.25mの尾根部平坦面に立地し、SK69を切っている。北側約1mにSI12が位置している。

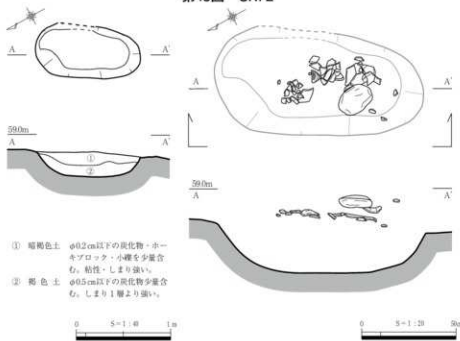
調査の経過 SK69を掘り下げている過程で、底面に微細な炭化物を含む暗褐色土の不整円形のプランを検出した。サブトレンチによって開口部から底部に向かって広がることがわかり、貯蔵穴の可能性が高いと判断し調査を進めた。

規模と形態 検出規模は開口部で長軸1m、短軸0.97mで、検出面から底面までの深さは1.2mである。掘り方は断面上半の内側に括れる部分が認められ、フラスコ状を呈している。Ⅴ層を掘り込んで底面としており、中央部に径38cm、深さ10cmのビットが確認された。以上の特徴から、本遺構を貯蔵穴と判断した。

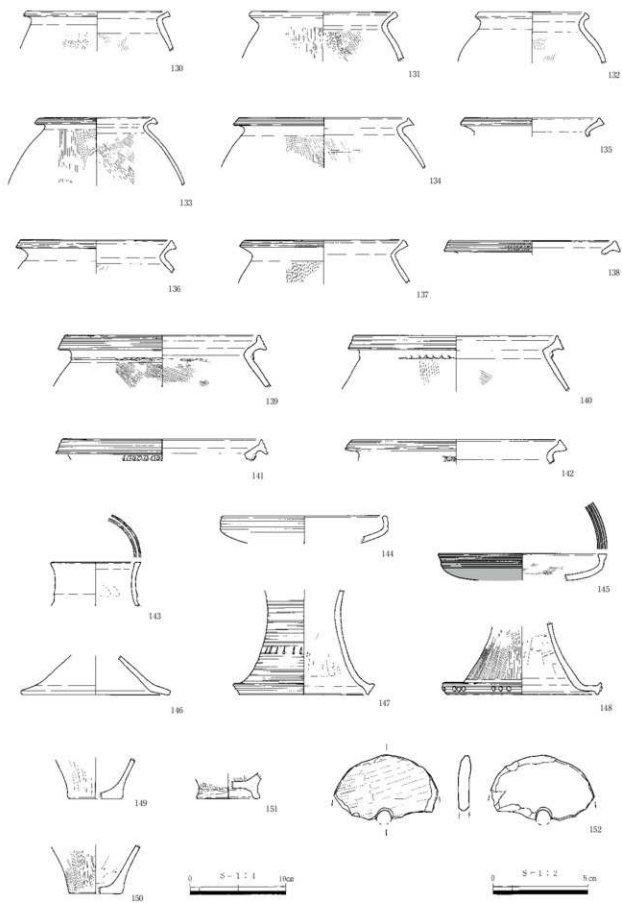
埋土と遺物の出土状況 埋



第43図 SK72



第44図 SK73



第45図 SK72出土遺物

土は12層に分層できるが、概ね上層は炭化物を含む暗褐色土、下層はホーキブロックなど地山を含む黄褐色土が堆積する。埋土は基本的に周囲から流入した自然堆積と想定されるが、遺物は上層から下層にかけて偏りなく出土することから、貯蔵穴廃絶後において断続的に投棄された可能性が高い。

**出土遺物** 遺物を第45図に掲げている。130～137は幅の狭い口縁帯に2～3条の凹線を引く甕である。頭部はナデ、体部はハケ調整が施される。138～142はやや拡張した口縁帯に3条の凹線がめぐり、139～142は頭部に刻目突帯が貼り付けられる。このうち139・140は刻みを施した後に突帯上半を強くナデ付けている。143は口縁端部に1条の凹線が引かれた直口壺である。144～148は高坏である。144・145はやや内傾した坏部の口縁直下に3条の沈線を施し、145は外面に赤色塗彩がなされている。147は完全に貫通しない三角形透孔を配し、上下段に多条平行沈線がめぐる高坏脚部である。148は脚裾がほぼ水平に張り出し、裾端部に3条の凹線施文後、円形浮文を貼り付けている。152は甕もしくは壺の体部破片を転用した紡錘車である。ほぼ半分ほどが欠損しているが、直径5.5cm、孔径0.7cmを測る。縁辺は打ち欠き後、粗い研磨整形がなされている。

**時期** 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

#### SK73(第44図、PL.19)

**位置** 調査区中央東寄りG16・17グリッド、標高58.75mの尾根部平坦面に立地し、南西側約3mにはSI12が位置している。

**調査の経過** Ⅲ層上面において土器溜りを検出し、精査を行ったところ炭化物を多く含む暗褐色土の楕円形のプランを検出した。なお、東壁の一部が木の根による攪乱を受けている。

**規模と形態** 平面形は長軸1.1m、短軸0.54mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは26cmで、壁面は55度の角度で外傾して立ち上がる。Ⅶ層を掘り込んで底面としており、やや湾曲している。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分かれ、上層は微細な炭化物やホーキブロックを含有する暗褐色土が堆積し、甕の体部破片などが出土している。下層は地山に類似した褐色土が堆積していることから、壁際からの自然堆積と考えられ埋没過程において土器が廃棄されたものと考えられる。

**時期** 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

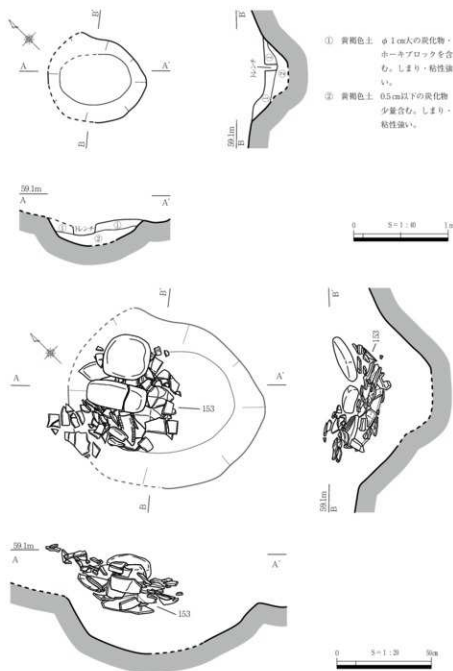
#### (6) 土器棺墓

##### SX16(第46・47図、表7、巻頭図版2、PL.20・21)

**位置** 調査区北東G16グリッド、標高58.75～59.0mの尾根部平坦面に立地し、南東側約3mにはSK66が位置している。

**調査の経過** Ⅲ層上面において亜円磔を検出し、精査を行ったところ下部から大型の壺153が潰れた状態で出土した。長軸32cm、短軸15cmの方柱状の磔がほぼ水平に、径24cmの円磔が検出面から30度の角度で隣接して配置されている状況が明らかとなり標石と判断した。

**規模と形態** 壺棺下部の土坑状の掘り込みは、北から北西にかけて木の根の攪乱を受けていたが、現況で長軸1.04m、短軸0.9mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは25cmで、壁面は40



第46図 SX16

**出土遺物** 土器棺153は口縁部に斜格子文が描かれ、3個1単位の円形浮文が貼り付けられる。頸部はハケ調整後、2条の指頭圧痕貼付突帯がめぐっている。突帯には指によってつまみ上げながら連続的に刺突が施され、下部の突帯は幅広である。肩部から体部はハケ調整後にヘラミガキ、底面は丁寧なナデが行われ、内面は剥落や風化により不明瞭であるがハケ調整後ナデが施されている。

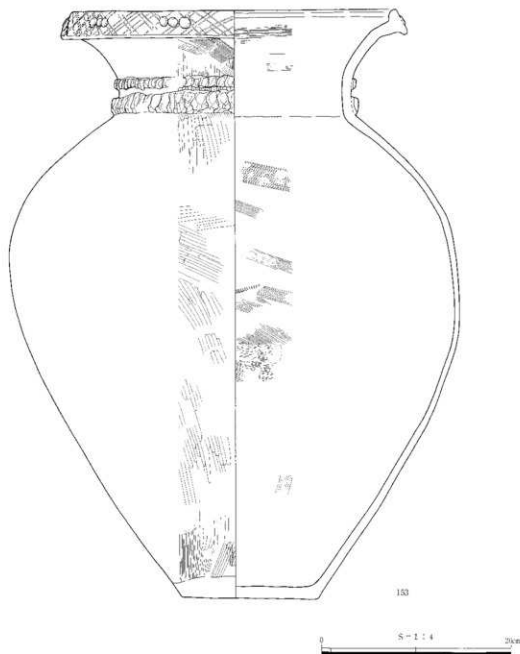
**時期** 遺構の時期は、出土遺物がⅣ-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考えられる。

度の角度で緩やかに立ち上がっている。

壺153は底面から17cm浮いた状態で出土していることから、土器蓋土坑と考えられる(吉田2000)。土圧によって器体は潰れ、転用土器のためか体部中位が一部欠損している。土器の間隙はほぼ密着しており、土坑埋土から副葬品などは確認できなかった。底面はⅦ層を掘り込んでおり湾曲する。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分かれ微細な炭化物を含むが、いずれもしまりが強く地山に近似した黄褐色土であった。

したがって人為的に埋戻しがなされたものと考えられる。壺153は口縁を南東方向に向け、68×60cmの範囲に厚さ20cmにまとまって出土している。上記のように体部の一部を除きほぼ完存しており、標石も部分的な攪乱を認めつつもほぼ原位置を留めていたと考える。



第47図 SX16出土遺物

(7) ビット

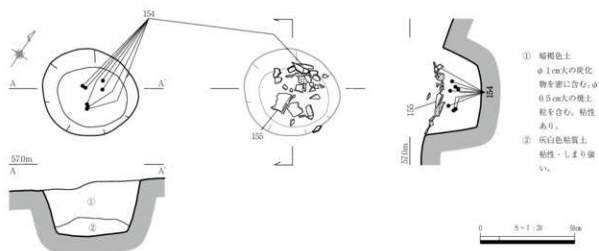
P154(第48・49図、表3・7、PL.22・34)

**位置** 調査区南西I18グリッド、標高56.75mの谷部斜面上に立地する。北側約7.5m上方にはSS4が位置する。

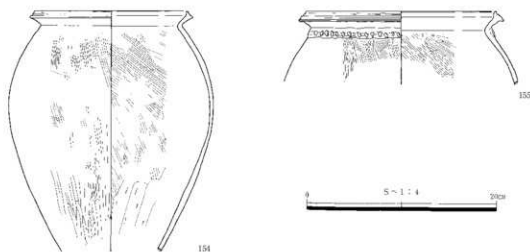
**規模と形態** 平面形は長軸50cm、短軸46cmの不整形である。検出面から底面までの深さは28cm、壁面は70度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は桶状を呈し、底面は不整形で平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は径1cm大の炭化物を密に含む上層と白色粘質土の下層に分かれる。白色粘質土は意図的に敷かれたものと判断され、甕154・155が1層中に横倒し状態で出土している。また、ビット検出面直上には多数の土器が廃棄されている状況であった。

**出土遺物** 154は口縁部に3条の凹線をめぐらせる甕で、内面は下半にヘラケズリ、上半をハケによっ



第48図 P154



第49図 P154出土遺物

て仕上げる。155は頸部に刺突を施した貼付突帯がめぐる甕である。突帯上半は刺突後にナデ付けられている。

**時期** 遺構の時期は、出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉と考える。

#### P172(第51図、表3・11、PL.39)

**位置** 調査区北東G17グリッド、標高58.6mの尾根部平坦面に立地する。北西方向4.5mにはSK66が位置する。

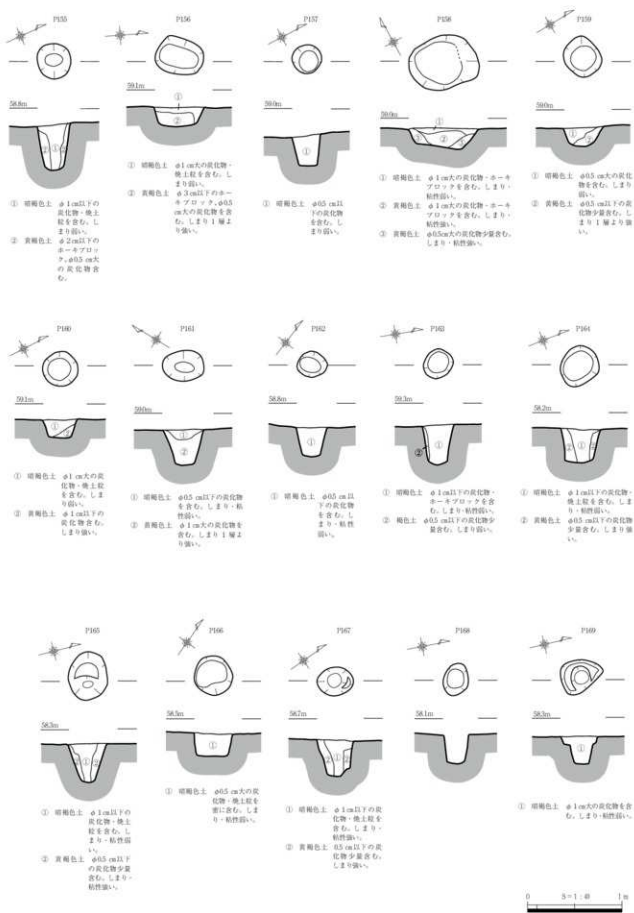
**規模と形態** 平面形は長軸0.75m、短軸0.6mの楕円形である。検出面から底面までの深さは28cm、壁面は60度の角度で外傾して立ち上がる。掘り方は桶状を呈し、底面は平坦となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は炭化物を含む2枚の黄褐色土に分かれ、下層上面から敲石S29が出土している。本遺構は比較的短期間に埋没したものと推測する。

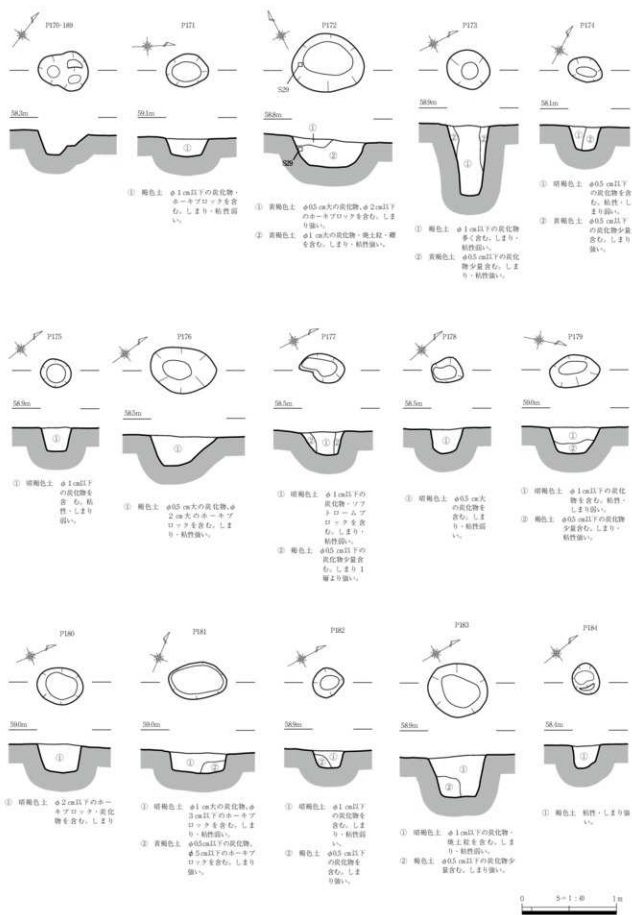
**出土遺物** S29は扁平な楕円形礫を用いた敲石であり、下面に敲打痕が認められる。

**時期** 遺構の時期は、埋土の特徴から弥生時代中期後葉と推定される。

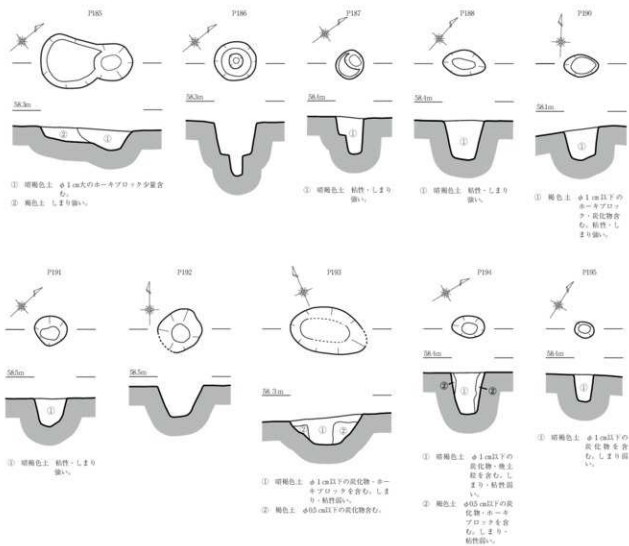




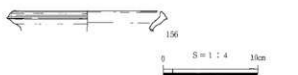
第50図 ビット(1)



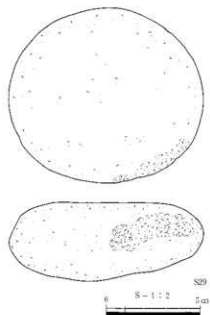
第51図 ピット(2)



第52図 ビット(3)

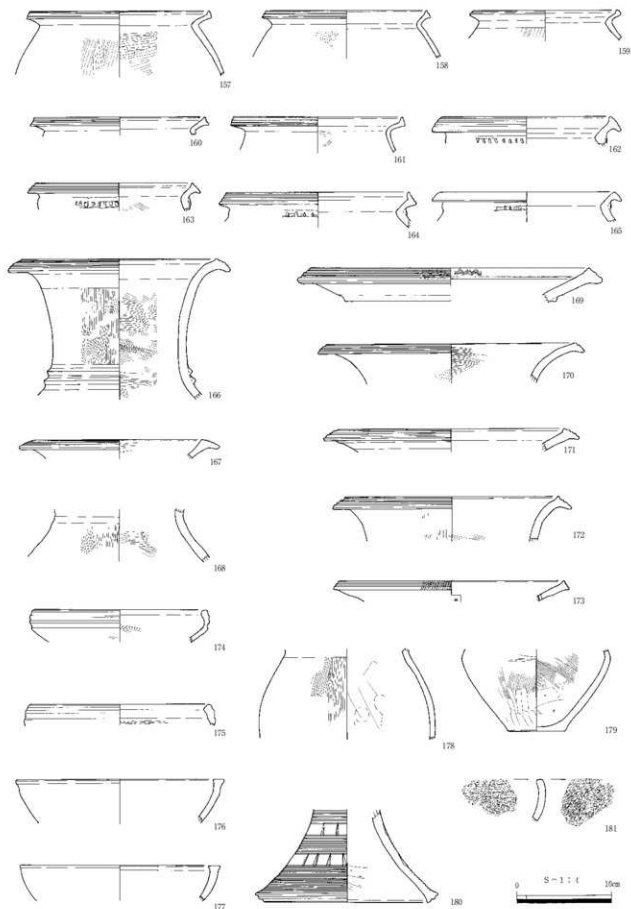


第53図 P186出土遺物

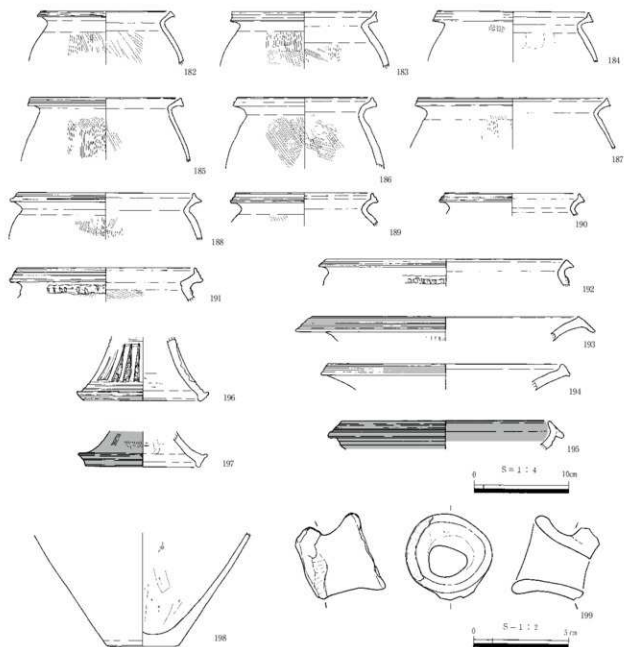


第54図 P172出土遺物





第56図 遺構外出土遺物(1)

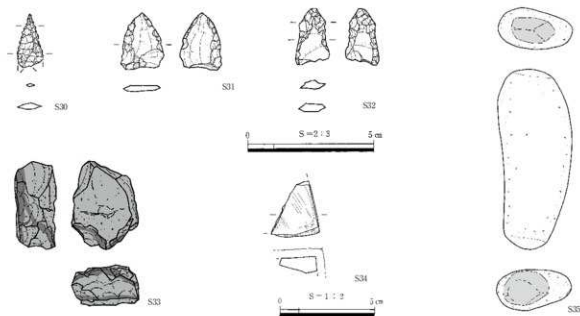


第57図 遺構外出土遺物(2)

## (8) 遺構外出土遺物(第56～59図、表7・8、PL.34・36～38・40)

ここでは遺構外出土遺物を掲載する。包含層はⅡ層暗褐色土とⅢ層の褐色土に分かれ、Ⅱ層中のものが多い。遺物の分布は調査区東側が希薄であり、西側谷部に偏る。谷部の土器埋設ピットであるP154周辺に遺物が集中している状況が確認された。

第56図はⅡ層出土土器をまとめている。甕157～161は口縁部に3条の凹線がめぐり、体部にハケ調整を施している。162～165は頭部の貼付突帯上に刺突文を施した甕である。166～173は壺の口縁～肩部である。166は大きく外反した口縁に3条の凹線を描き、頭部はタテ方向のハケと2条の突帯がめぐり。169は口縁内面に櫛描波状文を施した壺であり、頭部に突帯が横走する。173は口縁端部に2条の凹線を引き、タテ方向に刻みを施している。口縁直下には1ヶ所焼成後の穿孔が見られる。174～177・180は高坏である。174・175は内傾する口縁直下に2～3条の凹線がめぐり高坏坏部であ

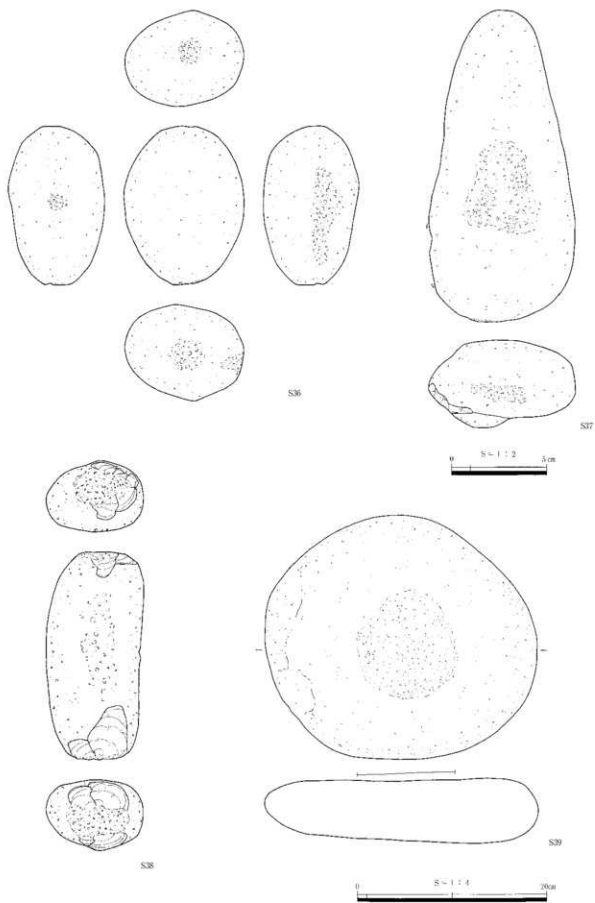


第58図 遺構外出土遺物(3)

る。176・177は緩やかに立ち上がり口縁端部が肥厚する坏部である。180はスカート状に大きく開いた高坏脚部であり、完全に貫通しない三角形透孔を2段配し多条平行沈線をめぐらせている。181は内湾する口縁部にRL縄文が施された縄文土器深鉢破片である。内面はヘラ状工具による粗いナデ調整が認められる。

第57図はⅢ層出土土器を掲げている。182～192は甕であり、いずれも口縁部に2～3条の凹線文を描いている。191・192は頸部に刻目貼付突帯がめぐり、突帯上半をナデ付けている。193・194は壺の口縁部であり、193は大きく外へ張り出した口縁部に3条の凹線が引かれる。195～197は高坏の坏部と脚部である。195は内外面に赤色塗彩が成され、口縁部が斜め下方向に張り出しており、3条の凹線が施文される。196は脚部に三角形の擬似透孔を配しており、内部は刺突が施されている。197は外面に赤色塗彩された高坏脚裾部であり、端部は幅広の凹線が引かれている。199は無頸壺の注口部破片であり、長さ3.5cm、幅4.5cmを測る。内外面ともナデ調整である。

第58・59図に石器を図示している。S30は黒曜石製の凹基式石鏃であり、脚部が欠損している。表裏面とも調整加工は中央部まで及び、鋸歯状に仕上げている。横断面形は概ね凸レンズ状となる。S31は表裏面に大きな素材面を残すササキト製の石鏃である。周縁部からの調整加工は中心部まで及んでおらず、横断面形も板状となっている。S32は表裏面の器体下半に素材面を残すササキト製石鏃である。器体上半は厚みを減じきれていないことから未製品の可能性も残る。S33は厚めの板状素材の縁辺を打ち欠いた赤色顔料素材であり、弥生時代後期の集落である琴浦町笠見第3遺跡で多量に出土している。S34はアブライト製の砥石片であり、縁辺部に研磨による稜線が生じている。S35は小型の棒状礫を用いた磨石であり、上下面に磨面が見られる。S36は楕円形礫の上下、左右の各面に敲打痕が認められる敲石である。S37はバチ形の棒状礫を用いた敲石であり、表面中央と下面に敲打痕が認められる。S38は棒状礫を素材とする敲石で、上下両端に敲打痕と敲打に伴う剥離痕が見られる。S39は大型の扁平礫の表面中央付近に弱い敲打痕がある台石である。



第59図 遺構外出土遺物(4)



表3 ビット計測表

遺構	ビット番号	長軸×短軸-深さ(m)	遺構	ビット番号	長軸×短軸-深さ(m)	遺構	ビット番号	長軸×短軸-深さ(m)	遺構	ビット番号	長軸×短軸-深さ(m)	
SI12	1	0.75×0.69-0.24	SI13	10	0.72×0.51-0.69	遺構外	SB2	4	0.39×0.39-0.42	遺構外	180	0.32×0.24-0.26
	2	0.30×0.30-0.54		11	0.63×0.54-0.18		1	0.33×0.27-0.15	181		0.52×0.34-0.28	
	3	0.33×0.33-0.18		12	0.33×0.21-0.18		155	0.36×0.34-0.48	182		0.48×0.40-0.30	
	4	0.39×0.33-0.54		13	0.39×0.33-0.30		157	0.50×0.36-0.20	183		0.62×0.40-0.21	
	5	0.42×0.27-0.24		14	0.42×0.36-0.21		158	0.30×0.30-0.32	184		0.34×0.30-0.18	
	6	0.36×0.33-0.33		15	0.60×0.45-0.18		159	0.74×0.58-0.22	185		0.62×0.58-0.44	
	7	0.27×0.21-0.15		16	0.74×0.60-0.48		160	0.44×0.40-0.20	186		0.34×0.28-0.24	
	8	0.30×0.27-0.24		17	0.45×0.30-0.15		161	0.36×0.36-0.18	187		0.96×0.50-0.22	
	9	0.27×0.24-0.30		18	0.33×0.27-0.15		162	0.44×0.32-0.36	188		0.42×0.40-0.56	
	10	0.30×0.24-0.15		19	0.96×0.84-0.33		163	0.32×0.28-0.30	189		0.30×0.22-0.38	
	11	0.36×0.24-0.18		1	0.63×0.51-0.18		164	0.32×0.30-0.42	190		0.44×0.28-0.42	
	12	0.45×0.24-0.12		2	0.60×0.51-0.18		166	0.44×0.42-0.32	191		0.54×0.38-0.24	
	13	0.27×0.27-0.30		3	0.71×0.57-0.21		167	0.52×0.42-0.40	192		0.36×0.24-0.32	
	14	0.39×0.36-0.90		4	0.30×0.27-0.18		168	0.44×0.40-0.24	193		0.32×0.30-0.28	
SI13	15	0.45×0.36-0.90	SI14	5	0.36×0.30-0.12	遺構外	169	0.38×0.30-0.36	遺構外	194	0.48×0.42-0.32	
	1	0.94×0.84-0.75		6	0.39×0.30-0.12		170	0.34×0.26-0.32		195	0.82×0.50-0.30	
	2	0.60×0.48-0.60		7	0.69×0.30-0.15		171	0.46×0.36-0.30		196	0.34×0.24-0.44	
	3	0.78×0.66-0.63		1	0.36×0.36-0.30		173	0.46×0.34-0.20		197	0.22×0.16-0.28	
	4	0.69×0.63-0.81		2	0.57×0.45-0.45		174	0.76×0.62-0.30		198	0.26×0.24-0.32	
	5	0.66×0.54-0.81		3	0.45×0.33-0.48		175	0.44×0.40-0.79		199	0.58×0.38-0.40	
	6	0.51×0.45-0.63		4	0.39×0.33-0.39		176	0.38×0.28-0.28		200	0.26×0.24-0.20	
	7	0.90×0.60-0.66		1	0.51×0.39-0.45		177	0.32×0.28-0.24				
	8	0.36×0.33-0.90		2	0.39×0.39-0.33		178	0.70×0.48-0.32				
	9	0.39×0.27-0.18		3	0.39×0.36-0.51		179	0.28×0.30-0.26				

表4 梅田萱峯遺跡2区出土土器観察表(1)

調査年	調査区	遺構	層位	土器名	形状・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上高
1	03R00	SI12	南上上部	03R16	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好	内周: スリ目	1170
2	03R00	SI12	南上上部	03R17	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1673
3	03R00	SI12-71	南上上部	03R18	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1742
4	03R00	SI12	南上上部	03R19	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1644
5	03R00	SI12	南上上部	03R20	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1662
7	03R00	SI13	南上上部	03R25	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1349
8	03R00	SI1571	南上上部	03R26	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		2128
9	03R00	SI1371	南上上部	03R27	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好	内周: スリ目	2207
10	03R00	SI1571	南上上部	03R28	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		2090
11	03R00	SI13	南上上部	03R29	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1320
12	03R00	SI13	南上上部	03R30	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好	内周: スリ目	1116
13	03R00	SI1371	南上上部	03R31	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		2116
14	03R00	SI13	南上上部	03R32	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	不良		1279
15	03R00	SI13	南上上部	03R33	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好	内周: スリ目	1336
16	03R00	SI13	南上上部	03R34	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1334
17	03R00	SI13	南上上部	03R35	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1335
18	03R00	SI13	南上上部	03R36	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1367
19	03R00	SI13	南上上部	03R37	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1316
20	03R00	SI13	南上上部	03R38	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1256-1259
21	03R00	SI1371	南上上部	03R39	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好	107-109 149-150	1489
22	03R00	SI1371	南上上部	03R40	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		2117
23	03R00	SI13	南上上部	03R41	白陶-体底	外周: 白陶-体底(胎土), 胎土(胎土) (胎土)	外周: 淡黄色 内周: 淡黄色	良好		1455-1466









表11 梅田萱峯遺跡2区出土石器観察表(2)

No.	採回・PL	遺構・地区・層位名	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S6	第100回 PL_38	SI12-P1 8層	砕片	緑色凝灰岩	1.8	1.7	0.5	1.5	1758
S7	第140回 PL_38	SI13-F3 埋土中	両側潤滑を施した 石鍬素材割片	サスカイト	1.80	1.75	0.55	1.9	2140
S8	第140回 PL_38	SI13 2層	石包丁	サスカイト?	△3.1	△4.7	△0.8	9.8	1202
S9	第140回 PL_39・40	SI13 2層	砥石	細粒花崗岩	5.9	3.9	2.2	97.5	1344
S10	第140回 PL_39・40	SI13 埋土中	砥石	細粒花崗岩	△2.1	△3.85	△1.7	10.6	1111
S11	第140回 PL_39・40	SI13-F6 埋土中	砥石	細粒花崗岩	9.2	5.9	6.5	360.0	1764
S12	第140回 PL_39	SI13 2層	砥石	安山岩	12.6	6.75	4.9	540.0	1184
S13	第160回 PL_38	SI14 1層	石杖	黒曜石	2.4	2.9	2.0	15.2	222
S14	第160回 PL_38	SI14 検出面	スクレイパー	黒曜石	△3.15	△2.9	△0.8	7.4	2236
S15	第230回 PL_38	SK62 1層	石鍬	サスカイト	3.4	1.9	0.35	1.9	1976
S16	第230回 PL_38	SK62 1層	石鍬	サスカイト	3.45	1.95	0.35	1.8	1857
S17	第230回 PL_38	SK62 検出面	石鍬	サスカイト	3.85	1.8	0.5	3.2	526
S18	第230回 PL_38	SK62 1層	石鍬素材割片	サスカイト	2.6	1.7	0.35	2.1	1929
S19	第230回 PL_38	SK62 1層	研削痕のある 割片	サスカイト	3.3	2.2	0.3	2.4	1859
S20	第250回 PL_38	SK63 2層	石鍬	サスカイト	3.25	1.9	0.7	2.4	2975
S21	第250回 PL_38	SK63 1層	石鍬素材割片	サスカイト	3.25	5.1	1.15	17.4	2870
S22	第250回 PL_40	SK63 2層	砥石	安山岩	△15.4	△8.5	△9.95	2200.0	3079
S23	第290回 PL_38	SK65 1層	石鍬	サスカイト	3.55	1.8	0.5	2.3	698
S24	第310回 PL_39	SK66 検出面	砥石	安山岩	9.45	6.5	3.1	280.0	254
S25	第360回 PL_38	SK68 1層	石鍬	サスカイト	△2.5	1.0	0.25	0.9	2486
S26	第400回 —	SK70 1層	石錘	安山岩	△8.75	△6.15	△4.9	260.0	613
S27	第420回 PL_38	SK71 1層	二次加工の柱 化木破片	柱化木	7.6	3.5	1.9	42.2	2720
S28	第420回 PL_40	SK71 1層	磨石	安山岩	4.7	3.45	2.4	57.0	2712
S29	第540回 PL_39	PI72 埋土中	砥石	安山岩	9.2	10.15	4.2	580.0	3233
S30	第580回 PL_38	— 覆乱土	石鍬	黒曜石	△2.1	△1.0	0.25	0.6	229
S31	第580回 PL_38	G18グリッド Ⅲ層	石鍬	サスカイト	2.25	1.7	0.25	1.1	568
S32	第580回 PL_38	G16グリッド Ⅱ層	石鍬	サスカイト	2.2	1.3	0.35	1.2	2812
S33	第580回 PL_38	H18グリッド Ⅲ層	赤色顔料素材		3.45	2.65	1.65	19.6	553
S34	第580回 PL_39・40	I14グリッド Ⅲ層	砥石	アブライト	△2.9	△2.55	△0.9	7.3	1795
S35	第580回 PL_39	I17グリッド Ⅱ層	磨石	安山岩	9.45	4.0	2.2	120.0	57
S36	第590回 PL_39	F16グリッド Ⅱ層 表土	砥石	安山岩	8.4	6.35	5.1	310.0	429
S37	第590回 PL_39	I17グリッド Ⅱ層	砥石	安山岩	16.4	7.7	4.6	690.0	151
S38	第590回 PL_39	H18グリッド Ⅲ層	砥石	安山岩	11.0	5.1	3.8	300.0	564
S39	第590回 PL_40	H17グリッド Ⅱ層	台石	安山岩	25.7	28.6	6.8	7420.0	1770